

審査の結果の要旨 氏名 佐藤 雅浩

近現代日本の精神疾患をめぐる言説は、狐憑きから神経衰弱、ヒステリー、ノイローゼ、PTSDに至るまで、医学の領域にとどまらず、新聞や雑誌などのマスメディアでも広く語られた。しかしこれらの言説の発生と変容、その社会学的要因をトータルに探求した研究は希少であり、本論文はその間隙を埋めるとともに、歴史社会学としても重要な貢献をなしている。

第1章では、本論文の二つの目的――①精神疾患言説の大衆化とその変容過程、その実態と社会史的背景とを通時的に記述し、②精神疾患に関する言説が専門家をこえて広く社会一般に広まる理由を比較歴史社会学の視点から分析すること――が提示される。分析の対象は、1870年代から1980年代にかけて、『読売新聞』『朝日新聞』に掲載された、精神疾患に関連するすべての記事である(読売6139件、朝日5335件)。第2章では1870年代から90年代(I期)にかけて、「狂気」をめぐる新聞報道では、専門家としての医師はマスメディアに登場せず、貧困や病苦など身近な社会経済要因から「発狂」を説明する言説が支配的であった。これは狂気に関する近世的言説と地続きである。しかし1891(明治24)年の大津事件を契機に、精神疾患の定義や、遺伝などの病因論が報じられるようになると指摘する。

第3章では1900～1920年(II期)にかけて、精神病者監護法や日本神経学会の成立を背景に、神経衰弱とヒステリーが言説として本格的に「流行」する様態が記述される。神経衰弱は、日露戦争時に大量の報道があり、近代化や文明化などマクロな社会変動が病因として強調されるのが特徴である。さらに読者投稿欄で投稿者が回答者と相互作用することで「病める主体」となったのも、この頃である。第4章では1920～30年代(III期)にかけて、鉄道脊椎症などの外傷性神経症が専門家内での議論にとどまり、大衆化しなかった原因が探求される。特に、被保険者に対する給付抑制の政府の思惑、疾患名称を大衆化する医学者や象徴的事件の不在、器質論から心因論への学説転換などの要因が強調される。

第5章では、1950～70年代前半(IV期)にかけて流行した「ノイローゼ」概念のもとで、生育歴に起因する精神的葛藤と、職場や団地という身近な生活空間がともに疾患の危険因子とされ、心因論的説明と社会経済的説明が結びつく。また70年代後半以降(V期)、日常的な心身不調を疾患に結びつける心身相関言説が主流となり、新たなメンタルヘルス概念が全国民が留意すべき健康問題としての地位を獲得することに至ると論じる。

これらの分析を踏まえ第6章1～4節では、各時期の言説における精神・身体・社会に関する相互関連の構造を示す。第I期では、貧困や病苦など個別的な不幸による発病が強調された。第II期では、近代化や文明化などマクロな社会変動が刺激となり、脳神経が疲弊するという説明が普及した。第III期では逆に、発症の原因や責任を直接的に社会に求める説明は抑制され、個人の心理的葛藤が病因とされた。第IV期では、精神分析的な心因論とともに、社会経済的変数も重視され、第II期と第III期の特徴が相互に結びつくという。この構造関連は説得的であり、精神疾患と社会の関係性の言説史としても示唆に富む。さらに6章5節では、スコッチポルの比較歴史社会学の手法により、疾患言説が大衆化する要因として、①医学界の中核研究者の参与、②精神医療体制の変動、③病因の不明確さ、④政治的抑制因子の不在が必要十分条件だという結論に至る。

審査の過程では、その史料検討の周到さ、論理展開の緻密さについて、審査委員全員から高い評価が得られた。医学史の観点からはマイナーな精神疾患を扱っている点、臨床研究を扱っていない点など留意すべき点はあるが、精神疾患言説と社会の関係を問う歴史社会学としては模範的であり、今後、この分野の研究を牽引する重要な論文となること、必定である。

よって当審査会は、本論文が博士(社会学)の学位を授与するに値するという結論に達した。